

# ソーシャルワーカーの職業像の研究

田中秀和<sup>1)</sup>

1) 立正大学 社会福祉学科

【背景・目的】ソーシャルワーカーの職業像を解明することは、潜在的福祉ニーズの掘り起しや、将来の福祉人材確保の点からも重要である。メディアに取り上げられることが比較的稀な職業である社会福祉専門職が、一般に広く市販される漫画作品の中でどのように描かれているかを多様な視点から考察することを目的とする。

【方法】研究対象として取り上げる作品の概要は以下の通りである。作品名：「健康で文化的な最低限度の生活」作者：柏木ハルコ 掲載雑誌：週刊ビックコミックスピリッツ（小学館）2014（平成26）年第18号～不定期掲載中。2016（平成28）年7月現在、単行本3巻まで刊行中。上記作品の中で、描かれたソーシャルワーカーの職業像を、ソーシャルワークの専門的見地から分析した。その際、当該作品におけるエンターテインメント性を否定することはいないよう、注意した。

## 【結果】

1) 肯定的に評価される点

i) 生活保護制度やケースワーカーの職務内容をわかりやすく提示し、見えにくい貧困を可視化している点。作品の中では、生活保護制度を運用していくうえで必須の知識である、日本国憲法第25条に規定されている生存権や、生活保護法の内容についても条文を登場させ、説明を行っている箇所がある。また、同作品では、シングルマザーの受給者を登場させることにより、見ようとしなければ、見ることができない貧困の可視化に成功している。

ii) 様々なケースを経験するなかで、生活保護ケースワーカーが専門的力量を高めていく過程が描かれている点。作品では主人公が、上司等から適切な指導を受ける中で、その専門性を高めていく過程を描いている。ソーシャルワーカーの力量形成過程に関する先行研究では、「職場内での優れた先輩や指導者との出会い」が、ソーシャルワーカーの成長に関与する一側面として取り上げられている<sup>1)</sup>。また、その後の類似研究の中では、「職場内での優れた人物との出会い」として提示されている<sup>2)</sup>。これらのことは、ソーシャルワーカーが業務を遂行していくなかで、迷いと戸惑いが生じたとき、適切に成長の契機を与えてくれる上司等の存在が必要であることを示している。この点において、本作品は、ソーシャルワーカーの成長過程を描き出すことに成功しているといえる。

ソーシャルワーカーの国家資格である社会福祉士に関する記載がなく、その養成課程が描かれていない点。

作品内において主人公は、当該職に就くまでの間に社会福祉に関する勉強をしてこなかった旨の記述が多々見受けられる。これらの記述は、生活保護ケースワーカーの専門性やその養成過程を軽視しているように受け取られる可能性がある。メディアの中で描かれるソーシャルワーカーを研究対象とした先行研究では、その養成課程を取り上げる必要性が強調されている<sup>3)</sup>。特に、漫画作品は、これから自身の進路選択を行っていくティーンエージャーが手にしやすい媒体である。そのため、今回取り上げた作品においては、生活保護ケースワーカーをはじめとするソーシャルワーカーの国家資格である、社会福祉士の資格名とその養成課程の記載が欠かせない。さらに、この仕事は誰でもできる仕事ではなく、確かな専門性と教育期間が必要であることを読者に提示する必要があるといえる。

【考察】今回取り上げた漫画作品は、一般には見えにくい職種のひとつである生活保護ケースワーカーを取り上げ、専門的な知識のない一般の人々にも、わかりやすく制度やワーカーの職務内容を提示していた。また、主人公をはじめとする登場人物が、徐々にその専門的力量を高めていく姿を描き出すことに成功していた。一方、職種の専門性について、それを養成教育課程の中で身につけていく過程や、その必要性についての記載がなく、その点については、これまでの先行研究が示しているように、改善の余地があると思われる。

【結論】ソーシャルワーカーを描いたメディア作品が増加することは、潜在的ニーズの掘り起しや、将来の福祉人材確保の点からも望ましいことである。今後も、当該分野における研究の進展が望まれる。

## 【文献】

- 1) 保正友子、竹沢晶子、鈴木真理子ほか：成長するソーシャルワーカー—11人のキャリアと人生，53，筒井書房，2003。
- 2) 保正友子、竹沢晶子、鈴木真理子：キャリアを紡ぐソーシャルワーカー—20代・30代の生活史と職業像，15，筒井書房，2006。
- 3) 田中秀和：医療ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマにおける職業像の研究，新潟医療福祉学会誌，12(2)：2-7，2012。